



リーダーとなる薬剤師を支援

日本薬剤師研修センターが30周年

薬剤師の生涯学習を支援する日本薬剤師研修センターは、6月に設立30周年を迎えた。2016年からかかりつけ薬剤師指導料の算定要件として研修認定を取得することが必須となるなど、生涯学習への関心や重要性が増している。提供する研修内容の充実も求められる中、豊島理事長は、生涯学習を通

豊島 聡理事長に聞く

——設立30周年を迎えた感想をお聞かせください。

30年間で医薬分業がかなり進展したことで、薬学部6年制への移行、健康サポーター薬局・かかりつけ薬局として地域医療の一翼を担うことが明確になったことなど、薬剤師を取り巻く環境は大きく変化した。

この変化に対応するには、求められる職能を薬剤師一人ひとりがリアルタイムで身につける必要がある。自己研鑽としての生涯学習が必須だ。研修センターは薬剤師の生涯学習支援を目的に設置されたので、30年間で役割が非常に重要になってきたと考えている。

——研修センターの事業内容を教えてください。

これまで、基幹業務である研修認定薬剤師制度に最も注力してきた。日本薬剤師会や薬科大学など

じて目指す薬剤師像について「地域住民の健康管理の中核を担い、次世代の薬剤師の育成もできるリーダーを見出し、支援したい」と語る。豊島氏は、30年間で生涯学習をめぐる環境の変化、事業を進める上での課題、今後の研修センターの方針などを語ってもらった。

Q、研修会は年に約1万8000人に達する。この制度を薬剤師にとって、より有用なものとするために、医学・薬学の進歩に合わせた質の高い研修を提供しないといけない。

研修実施機関は約200

認定取得後も研鑽が必要

大学で生涯学習の意識づけを

——事業を進める上で、困難に感じたことは何ですか。

生涯学習に取り組む薬剤師を増やすことだ。日本では免許更新制ではなく、研修も義務化されていない。さらに、医薬分業の進展で薬剤師が多忙になっており、休みが少なく、研鑽に来てもらえない人が増えてきた。研修センターに来てもらうことは難しいことだから、設立後はばくは認定取得者は年間2000人程度だった。

薬学部の6年制移行後は、4年制で卒業した人が6年制と同等の知識を持ち合わせている必要があるため、認定を取得する薬剤師が大幅に増加したが、全薬剤師数から考えるとまだ多くはなかった。しかし、かかりつけ薬剤師になるには研修認定を取得することが要件となったこともあり、16、17年には年間約4万2000人に急増し、現

い。また質にはばくつきが見られるものの、薬剤師にしっかりと学習してもらえる内容になっている。研修会に参加しにくい地域に居住する人や多忙な人などに向け、オンラインで参加できるシステムも提供しており、受講者の利便性を高めている。

認定を取得すること自体は10万人を超えた。

自己診断表の提出を義務化

受講から認定までシステム化

——現在、注力している事業は何かから注力したい事業を教えてください。

薬剤師が自己研鑽により生涯学習の成果を確実に高めたいためには、自己研鑽結果について自己診断することが必須だ。この自己診断のために薬剤師研修センターでは、生涯研修自己診断表(薬剤師生涯研修の指標項目)を薬剤師研修手帳に記載し、学習の充足度を各項目で診断し、バランスよく学習することによってレベルを高めることを薦めてきたが、ほとんどの人が利用してい

ない現状だった。そのため、4月からこの自己診断表を認定申請の際に提出することを義務づけた。個々の薬剤師が成果を積み上げることを利用するだけでなく、研修センターとして生涯学習の支援・推進にこれを利用する。

研修受講から認定証の発行までを一貫してシステム化する計画もある。現在は、単位の不正がないかどうかを職員が1件ごとを確認しているが、受講者数が急増したことで職員の負担も増した。システム化はこの状況を改善するためのもので、例えば、受講する薬剤師

める社会的要請に応えるため、00年に漢方薬・生薬認定薬剤師制度、12年には小児薬物療法認定薬剤師制度をスタートさせるなど、時代の流れに即して必要なものを取り入れてきた。また、6年制薬学教育に対応するため、認定実務実習指導薬剤師制度も実施しており、新卒の薬剤師を育てるためにも非常に重要な事業と考えている。

非常に重要となる。——生涯学習に関する課題を教えてください。

現場の薬剤師が実務実習指導を行っていることを考えると、大学との連携が非常に重要だと思える。大学のコアカリキュラムには「薬剤師として求められる10の基本的資質」が記されているが、これらの資質は、決して大学で教育が完成するのではなく、生涯学習と関係がある。薬剤師の資質を生涯にわたって伸ばし続けるという考えを大学でも教えてほしい。

ただ、大学の生涯学習に対する学生への意識づけが弱いと感じる。実務実習の指導に関しては、研鑽なので、不正に受講シールを取得したとしても、受講していない人がかかりつけ薬剤師として患者に対応できるかは非常に疑問だ。長い目で見れば、薬剤師の職能を十分に果たせない事態に陥る。ただ、そのような薬剤師が出てくると、薬剤師全体の信頼を損ねることになる。不正をなくすため、長期的には受講から認定証発行までのシステム化でシールの売買防止を図りたいが、まずは研修会の実施者に受講者名簿を整理してセンターに提出し、シール受領者の本人確認を必ず行ってもらおう。今月から、全ての研修会実施者にこの対策を行ってもらおう。業務量が増えている。業務量が増えると思うので、この人たちの支援を

——研修センターの今後の方針を教えてください。

令和の時代も、薬剤師を取り巻く環境に大きな変化があると予想する。これに対応するには、やはり自己研鑽にしっかりと取り組まないとはいけません。具体的には、地域住民の健康管理の中核を担い、次世代の薬剤師の育成もできるリーダーを見出し、支援したい。そのため、16年から薬剤師生涯学習達成度確認試験を実施しているが、合格者はリーダーの資質がある薬剤師と見ているので、この人たちの支援を

願いをこめた新薬を、世界のあなたに届けたい。

「病気と苦痛に対する人間の闘いのために」

わたしたちは、新薬の開発に挑み続けます。

待ち望まれるくすりを、一日でも早くお届けするために。

ONO 小野薬品工業株式会社